

東京大学という最高学府において、仏教が正式科目の一つにされたということは、将来、国家を担う学生たちにとって、仏教は学ぶべき分野であると認められたことを意味する。また、仏教はインドの哲学であり、東洋哲学の一つとみなされたことにより、仏教は西洋哲学と同等に位置づけられたといえる。そこで吉谷は、このようなカリキュラムの改正を歓迎し、仏教復興の足掛かりの一つとなると考え、講師の職を引き受けたものと推測される。

四 『天台四教儀』の講義目的と方法

吉谷は『天台四教儀』に先立ち、『八宗綱要』の講義を行っている⁽¹⁾。『八宗綱要』の著者は、鎌倉時代の擬然(一二四〇～一三二一)であり、仏教が伝播した歴史と、八宗(瑜伽宗・成実宗・律宗・法相宗・三論宗・天台宗・華嚴宗・真言宗)の歴史及び教理が簡潔に説かれたもので、八宗の概要を知ることのできる入門書とされている。したがって、「教相専門学者」として東京大学に招かれた吉谷は、まず、仏教の歴史と各宗派の教理についての基礎知識を習得させるため、『八宗綱要』を講じたと考えられる。

一方、『天台四教儀』は、高麗の諦観(？～九七一)が執筆したもので、鎌倉時代に誕生した日蓮宗・浄土宗・浄土真宗などの原点となった天台教学の入門書である。先に述べたように、原はこの天台教学を学んでいないとされ、吉谷の招聘へとつながったのである。そこで吉谷は、『八宗綱要』について講じた後、八宗のなかでも日本仏教の母体となった天台教学に関する知識の修得を目標とし、『天台四教儀』を講義内容として選んだものと思われる。また、天台教学は、修行のみならず教説の理論的究明を肝要としている。したがって、吉谷は天台教学を通じて、仏教は西洋哲学に匹敵する理論的内容をもつものであることを示

そうとしたのではないだろうか。

ところで、『高嶺遺稿』によると、吉谷が使用したテキストは、『天台四教儀』の注釈書の一つであり、元の蒙潤（一二七五～一三四二）が執筆した『天台四教儀集註』であることがわかる。吉谷は、後に大谷教校においても『天台四教儀集註』をテキストとした講義を行っており、その手控えに筆を加えたものを『天台四教儀集註略解』として、一八九八（明治三一）年に出版している。『高嶺遺稿』の多くの部分はこの著書の記述と合致している。

また、吉谷の講義は、計八二の項目を立て、各々について解説するという方法を用いている。その理由については、『東京大学年報 第五卷』によると「強チニ教科書ノ文句ヲ解釈セス務メテ其義脉ヲ了知セシムルヲ目的トス故ニ四教儀一部ノ顛末ニ亘リ其精要ヲ採択シテ教観大綱五時八教等ノ若干ノ科目を設ケ」（五一～ページ）たのだと述べられている。

注

（１）佐藤厚「井上円了『八宗綱要ノート』の思想史的意義」（『井上円了センター年報』第二二号、二〇一三年）によると、東洋大学附属図書館に所蔵されている井上円了の『八宗綱要』は、吉谷による『八宗綱要』の講義内容もしくは吉谷の手控えを書写した筆録であることがほぼ間違いないだろうとされている。